

遠い虹

岡本好古

遠い虹

岡本好古

徳間書店



遠い虹

著者／岡本好古

1987年12月31日 第1刷

発行者／荒井 修

発行所／株式会社徳間書店

郵便番号105-55／東京都港区新橋4-10-1

電話 東京(433)6231／振替 東京4-44392

印刷所／本郷印刷機 製本所／ナショナル製本

©Yoshifuru Okamoto, 1987

定価は帯・カバーに表示してあります。

乱丁・落丁本は本社またはお買い求めの書店にてお取り替えいたします。

〈編集担当 今井鎮夫〉

Printed in Japan

ISBN4-19-123574-5

遠い虹

目次

第一章	「彼方に虹が」の断崖	5
第二章	謎の壮者	21
第三章	虹の東端へ	39
第四章	鴛鴦 おしどり の契り	57
第五章	籠 かご を脱した青い鳥	76
第六章	夢中の胡蝶	88

第七章 端緒

106

第八章 隠し文？

121

第九章 エニグマ解読

140

第十章 連想と推理

156

第十一章 ドット ストライプ 点と線の表意

169

第十二章 ヒロインの陳述

208

あとがき

220

装幀 井上正篤

第一章 「彼方に虹が」の断崖

昭和二十六年三月末のある午後である。熊野灘くまのなだに面する尾鷲港おゐせに、一隻の大型ランチが入ってきた。立ったままなら二十人は乗れそうな大きさだが、これはあくまで岸と碇泊艦船ていはくかんの間の渡し舟である。ランチは、米艦艇がすべてそうであるように、鮮かなライトグレーに塗られ、船首には、所属番号が黒の縁どりで、白く浮きだされている。乗り手は濃紺の冬期服に白いキャップの水兵三人、それに士官一人の四名だけだった。

強い海風がわたり、やや膚寒はださむい。

船首から造波の歯がみが消えた。ランチは推進機を逆回転しながら、港内でもいちばん小さな埠頭もどへしたい寄った。少しはなれた陸の上や、漁船から三三五五、日本人がこの様子をみているだけである。それも、ランチの船尾にはためく星条旗をみて、初めて視線を向けた感じである。この一隻の米軍ランチの入港はほとんど目立たなかった、というよりも、港の住民の彼らにも、米進駐軍はカーキ色の服をきた陸軍や海兵隊の兵隊という先入観こうかんが牢固ろうことしてあるからでもあろう。

実際には日本全土に進駐する米軍のうち海軍の将兵が陸軍、海兵隊より遙かに多かった。

この港は、基地占有地区(Area on limit)には属さない。だが、在日米軍はこの翌年まで占領軍(進駐軍)と呼ばれ、日本全土の山川草木と全海岸線を思うままに支配し、占有できるわけである。

昨年六月に朝鮮動乱がおきてから九カ月目になる。戦況はアメリカや韓国にとってはなほだ芳しくなかつた。

中国軍の介入で、共產軍は騎虎の勢いで盛り返し、大部分が米軍である国連軍は、下手をすると朝鮮半島からすっかり掃きだされかねない危急のときであつた。

だが、七十一歳の老兵、マッカーサーは、側近の将軍たちも本国の大統領、統合参謀本部スタッフも呆れ返るくらい、強攻策を主張してゆずらなかつた。

それだけでなく敵軍司令官への降伏勧告を声明したのも、五日前のことである。

有史以来この国に君臨したいかなる権力者よりも施政を徹底させ、大日本帝国を廃嫡し、日本が化学変化して生れ替つたようなマッカーサーの占領軍政はまさしく世界の施政史上の驚異であらう。

米人による、日本人のための、また日米の両国が契友となるための、この目まぐるしい五年余りの成果でようやく、生々しい焼跡のにおい、終戦後という空気を拭い去つた感じである。そう思つてひと息つく間もなく、彼岸の大陸の一角で再び戦火がおきる、とは皮肉なことである。

この物騒な老兵が最高権力者の座からひきずり下ろされるのはなお四カ月後のことだが、下手をする

と第三次世界大戦を誘発しかねない緊迫した情況だつた。

そのことは一般の日本国民も、進駐軍の将兵もほとんど知らない。まして動乱の地にはそつぽを向けたような太平洋岸のこの港町などは、千古不変の海鳴りのほかは、単調で静かな明け暮れだつた。

ランチが埠頭に接岸するなり、水兵がもやい綱を投げた。士官は舷側から埠頭へとび移つた。そのうしろから水兵が二人がかりで重いバゲージを抱えあげ士官の足許に下ろした。

「サンクス、波のスリル満点の長い航路だった」

士官が、そういつてねぎらうと、赧ら顔のランチの長らしい水兵が両手をひろげるジェスチャーとともに答えた。

「どういたしまして、スリルを味わえて有難てえのはあつしらす。大戦も終り、折角、朝鮮でおつ始まった戦でも、海軍の水上部隊には、てんでお声がかからない有様で。きょうのように、フルスピードでぶっ飛ばせるなんてめったにない役得でさあ。水上そりとなって突走る御用を、どしどし作って下せえ。いつでもアラッデンのランプの大男のようにはせ参じますぜ、サー」

士官の服装は——白い覆いと草花模様をあしらったひさしの軍帽、金モールの肩章、襟章、袖章で凜しい外套——の冬期正装であつた。階級は少佐である。

帽子からはみだしてみえる見事な金髪、緑がかつた蒼い瞳。それに少し陽焼けた淡紅色の膚は、折からのインディゴ（濃紺色）の熊野灘とすぐ足許にはためく星条旗を背景に、判で押したような、「米海軍士官」の容姿である。

いまの会話では、相当な距離を走破してきたようだ。鳥羽あたりからだろうか。そうすると百二十キロはある。水兵が堪能したといっているから、ひよっとするともっと遠く、四日市や名古屋港あたりからくりだしたのかもしれない。

よくみるとこの大型ランチは小魚雷艇を改造した代物のようである。それにしても、志摩半島を回つて大王崎からこの尾鷲までの外洋航路は、もろに黒潮の本流とぶつかる。それを快速で突走るのだから「水上そり」の形容も誇張ではなからう。

年の頃は四十半ばとみえる少佐は、強い海風がわたる、明るいこの港をうちながめ、心もち鼻翼をうごめかした。ランチの排気ガスの臭いがつきまざっているが、彼は海風にことさら強い潮の匂いがかぐ気がした。そのことを述べると、例の水兵長が、元氣よくいった。

「そりゃ、ここは、太平洋をぐるぐる回っている海流の中でもいちばん濃い奴がぶつかる岸ですぜ。ここから真東をもし千里眼でみれば、米西岸が丸みえってわけです。……ほら、お迎えが参りやした、少佐」

彼方に一台のジープが現れ、いったんロー・ギヤーに入れ替え、物々しいエンジン音を立てて埠頭に入ってきた。車体は艦載機のようにインディゴで塗り上げられ、US NAVYの白文字が浮出されている。運転手は、ランチ乗員と同じなりの水兵だった。

助手席から三十そこそこの男がはねるようにとびおりて、士官の前に立った。多彩なペットマークをいくつもあしらった革ジャンパーをまとい、先が平たい褐色の靴は、アイスクリーム用のスプーンを思わせる。二つともキングサイズの米兵用の代物である。

士官は、この男を「二世」と見てとった。

「私は基地の通訳、テッド・ヤマダです。ようこそ、ジョン・ハンフリー少佐」

男は小柄で敏捷そうなからだにふさわしく、潑刺と述べた。

「ハウ・ドゥ・ユー・ドゥー、テッド・ヤマダ。君は二世ですね」

テッドは陽やけして引締まった顔をゆがめて苦笑した。

「イエス、と答えておきます。ぼくはそう自覚していますが、ちょっと複雑な事情があるんです。西海岸にいたので、戦争が始まってすぐ米国の市民権がありながら強制収容され、まもなく日本へ送還されました。日本では三年間、どっちつかずの身分で、疑いと冷遇に甘んじる辛い毎日でした。まあ、ひどい貧乏くじをひいたわけです」

だが、そのような話にそぐわぬはずだ声調である。

「昼前、MMGT（津に在る三重軍政部）から、少佐がランチに乗られた時刻が通報されてきました。時間に余裕をもって迎えにきたのですが、まったくびったりでしたね。うちのオクラホマ基地はここか

ら三十キロほど行った、岬みさきにあります。熊野灘に大きく突き出ていて、黒潮の荒波が直撃する。ちょっと絶海の孤島の感じです。もっとも基地は断崖の上の平地にあります」

そこは九木崎NCRB（海軍通信連絡基地）と呼ばれ、オクラホマは米兵の間の通称だった。ハンフリー少佐はその新たな長、管理指揮官として赴任きんしてきたのである。

テッドは基地全員の名前をタイプしたリストをとりだし、

「士官、準士官五名、下士官十五名、水兵三十名、この私もいれて米国籍民間人五名、日本人雇用員二十名、それにプラス、新任の少佐とで七十六人になる、まあ、Dクラスの基地です」

「思っていたより多いな。世界最小の独立国よりも人口は大だ」

だが、少佐は別段そのリストを手にとってみるふうでもない。張切ってまくしたてるテッドとは好対照に、落着いた物腰だが、何かしら気だるそうな様子がかがえた。およそ胸おどらせて新任地に乗込んで来た、とは思えない。

テッドは、その職業がら、この人物がおよそ、「はしゃぐ」型ではなく、寡黙かもくで沈思的な人柄と見てとった。肩すかしをくらう思いだが、テッドは、自分の多弁に急ブレーキをかけるわけにもいかず、続いて、基地要員たちのプロフィールの叙述にかかろうとした。

それを振りきるように、少佐は、いきなり尋ねた。

「ところで、この港の地名は何というのだね」

「はあ……」

テッドは一瞬、あっけにとられた。そんなことも知らないのか、といったげに、

「オワセ……ミエ・プリフェクチュアーに属します」

と答えた。

「オワセ……ちょっとハワイ語に似ているな。いや、実は私はサン・フランシスコから日本へ直行して

きたのだ。輸送機で厚木に着いて東京に二日間、ついで名古屋で一泊しただけのあわただしい日本初旅行となった。もっとも以前からこの国の歴史と人間について少しは勉強したが、地理の方はからきしまだな。ただ、日本の真ん中のふくらんだ処がキイ半島と称ばれ、その突端に岬があることだけをホノルルを発つ前に教えられた」

「このオクラホマ基地はですね」

「基地の様子についてはかなり詳しく教えられた。それを納得の上で私は赴任を承諾した。まるで、いま初めて日本に上陸した心地だ」

助手席に少佐が坐り、テッドは後席に収まったが、前席の背にひじをもたれさせる姿勢になった。走行中も解説役をつとめるのに恰好な姿勢である。

ジープの前方には、金の紅葉印の小旗が立てられてあった。少佐の階級章である。

「ごらん下さい。このジープは、オクラホマ基地司令、ハンフリー少佐の旗艦です」

「少佐の記章も将旗になるのかね」

「何しろ、少佐は基地の長ですから」

旗艦——の表現に少佐は面映ゆそうな顔になった。

ふつう、新司令官赴任の際、ジープに階級章の旗をつけるようなしきたりはない。少佐は茶目気のあるテッドの浅黒い顔を見て鼻白んだ。そこには微塵も、追従の気配はない。さっき、戦時下の両国で冷遇されてひどく苦労したといったが、そのような過去のかげりはうかがえない。育った土地と天性にもよるのだろうか。

「テッド、君の生いたった処はどこかね」

「南カリフォルニア、それもサン・ディエゴに近い南限の農園です。オレンジの色とにおいて育った幼

少年時代でした。日本に送還されるまで雪というものは字面でしか知らなかったのです」

「私の方は二十ごろまで北ダコタのカナダに近い町だった。太陽の光は弱く、真夏以外着ぶくれ通して、米国も北極圏に入るのか、と思うような処だ。生い立った土地は養父だな。性格が天性よりも強く形づくられるようだ」

ジープは猛獣のようにダッシュした。路ばたで子供たちが「ハロー、ハロー」と連呼して手を振る光景が二、三個所みられた。運転手とテッドは口笛と小さな手振りで応えた。そのながめもあつという間に流れ去った。

進駐して間もない頃は、こうした子供の歓呼のたびにジープがとまり、米兵が粗末なりの子供たちを抱き上げ、頭をなでたりしたあと、チューインガムやキャンディがばらまかれたものだが、もう最近では、「失礼な友誼」と気遣つてか、そんな交歓風景はなくなった。終戦から六年目、日本の町並と、日本人の風采は、もう敗亡感から、すっかり脱けだしている感じである。

いま初めて来た少佐には、そうした変貌は分らない。

ジープは小さな町中をたちまち通りすぎてしまった。少佐はフロントのふちをつかみ、後席のテッドも前席の背のふちを両手で強くつかんだ。町中のコンクリート舗装がつきて、大きなえくぼだらけの路に入ったのである。それでも、もうもうとジープ自身が舞い上げる土ぼこりをかぶらないため、スピードをおとせない。

米軍のジープは前輪後輪とも起動できるシステムになっていて、それ自体スプリングの役を果たす。戦車とも追いかけることができるといわれる根っからの戦闘車両である。

「少佐、日本の第一印象はいかがです」

ふと、テッドは後ろから問いかけた。常套的きわまる設問だが、この時はごく自然なものに感じられた。田野がつきて、左側の視界が忽然とひらけた。

路は急斜面の中腹を縫って進むカーブの続きとなった。時刻はもう四時に近い。だいたい傾いた陽のせいか、海原は、やや赤がかった「蒼」を呈している。東から南の方にかけて水平線は淡青色の空となじんで、ぼやけてみえる。

いわば、くっきりとした水平線がとりさられて、海、空の別などないとてもなく広い空間が横たわっている——飽くほど見慣れているこの四人も、この眺望を前にするたびに、そのような倒錯感を覚えるのである。

「限りなき拡散の衝動」——ハンフリー少佐は、ふと、この語句を、率直な自分の感覚として胸中つぶやいてみた。

そして、少しおくれたが、テッドの設問にしみじみとした口調でこたえた。

「静かで、こぢんまりした佳い国のようだ。とくに、港からここまでのたたずまいが好ましい」
路は、多いカーブに加えて、勾配の上り降りがかなりはげしい。崖を切りひらいただけの路面はほとんど岩床にひとしく、海側の路肩が少しせり上がっているのがまだしもある。むろん、ガードレールなどない時代である。運転手は二段ギヤーに入れ、スピードをおとして慎重に運転した。

「ここを通ると、西海岸か、ハワイ諸島の道を走っている気がするんです。これぐらいの高所からだて海と空の広漠感が砂浜でみるより、ぐんと倍加する。少佐は西海岸やハワイに居られましたか」

「ヤー、西海岸にはしばらく住んだことがある」

少佐は、そう応えただけだが、それはテッドへの共感を語っていた。

前方に岬の先端がみえてきた。文字通りの絶壁で、裾の岩礁に寄波が歯がみする様が鮮やかにみえる。突端より少しこちら寄りに松林に囲われて、角ばった建物らしいものがかろうじて見分けられる。

「あれが、うちの基地です。ほれ、アンテナの黒い柱がみえてきたでしょう。リーダーサイトは少しはなれて、向う側の断崖にあります」

テッドは右手をのばして少佐の眼を誘ったあと、思いだしたように、その右手を東の方に転じて、い足した。少佐はくびをうんと左の方へ曲げさせられた。

「ちょうどこの付近をみんなは『彼方^{かた}に虹^{にが}』の断崖 (rainbow overthere cliff) と呼んでるんです」「レインボー……だって」

「雨あがりのあとや晴天下のにわか雨の時など、ここから真東の虚空に、よく虹が架かるというのです。生憎^{あいにく}はまだ一度もみたことがないんですが、それはとても大きな弧^{アーチ}で、色も鮮やかで、まるで海が天へ吸い上げられてきれいなニンフになったような景觀だそうです。この辺に二日間立ちん坊でいれば、必ずあやかれるといわれるほどです。それも、両端はほぼびったり東西それぞれの方位に位置し、消え入りながらも、尾鷲港の沖合海面付近に西側の脚許は下りており、そして、東側の脚は、あの水平線を遙かにこえて、のびているそうです。ここからは斜めにながめるため、やや尖^{とが}った放物線状の虹にみえるわけです」

「きょうはどうだろうね」

「どう考えたって駄目ですよ。朝からほとんど雲量ゼロの快晴ですから」

ジープは急に徐行に入った。

「ああ、また立っている。こんな日に虹など見えやしないのに」

運転手の声に促されて、少佐は二十メートルほど前方の路肩に立っている人影を見やった。

それは米軍の宇治茶色の作業衣を着た五十すぎと思える日本人だった。

男はジープに気がついて、軽く手をふった。

その傍らを最徐行でよぎる時、

「ナカタさあーん、早くおかえりなさい。崖つぶちだから危いですよ。きょうはどうです、ひょっとしてあなたの眼には虹が映るんじゃないかな」

テッドが大きな声でいった。ナカタと呼ばれたその人は、ちょっと照れたような微笑をみせた。そして、助手席の少佐に視線を向けて、軽い会釈をむくいた。

「ハウ・ドゥ・ユー・ドゥー、ジェントルマン」

少佐は右手を少しあげて笑いかけた。それは教養ある米人にみられるごく自然な気楽さである。

ジープが走りだし、遠ざかるその人影は斜陽を浴びて立ちつくしていた。

「彼も基地従業員です。ちょうど勤務時間が終って帰る頃合なんです。基地では、雑役係（ジャニター）として働いています。兵員の間では「何でも屋」として重宝な存在です。掃除が主ですが、家屋、屋根、水道管などのちょっとした修復を器用にやっけてのける。前は何をしていた……ですって、少佐、それはよく知りません。総体に、進駐軍勤務の日本人には並々ならぬ身の上の人が少なくないんです。何しろ、いったん崩れて、息絶え絶えながら立上ったという国です。個人の運命も目が回るくらい変化したことでしょう。元外交官や貴族という人たちが通訳、書記などの事務仕事ならまだしも、ハウス・キーパーや労務者に甘んじているのが現実です」

ナカタが立っていた崖から三百メートルも走ると、基地のゲートがみえてきた。

『Naval Communication Reconnaissance Base』のナジック文字が、大きな扇面状のプレートに描かれている。その下がゲートというわけだが右側の小さな番小舎の壁にベルトをしまてカービン銃を肩から吊した水兵が所在なさそうにもたれている。遮断バーしやだんなどなく、そこは、全く開け放しの入口である。ゲートの両端から基地のまわりに高さ三メートルもの鉄条網がめぐらされているが、この衛兵とゲートのたたずまいのせいか、軍事施設のものらしい遮断感ほとんどない。

このオクラホマ基地は、東京、福岡、佐世保など人間の出入りが繁はげしく煩瑣はんさなキャンプと比べると、信じられないほど閑居をかこつ処であった。